

ブッソウゲの花に寄せて

故 細 川 隆 英*

私は台湾からの引き揚げ者である。日本から台湾に渡ったのは、大正5年の春3月であった。年は6歳。母親につれられて妹と共に門司港から乗船して、約1週間かかって基隆（キールン）に上陸した。これは我家が破産して、父親がすでに単身で知人をたよって台湾に渡っていたためである。

上陸したら珍しいものがあたりいっぱいあったが、大輪の真っ赤な花が咲く常緑のブッソウゲという花木が印象的であった。日本には無いものである。

これは台北の知人の家の庭でも普通に見られた花木であった。その家に一週間ばかり滞在して付近の風物を見物した。

その後台北市の近郊にあたる大坪林という、田圃の真ん中に建っている台湾人の子弟を教育する学校の官舎に移った。

日本にいる間は家に財産が少しばかりあったが、その当時の一般の風潮として高等教育の必要を感じず、祖父達は父を師範学校の簡易科に入れて、そこを卒業させた。父は資格を持っていたので、学校の先生の職を求めたのである。

その翌年、私は就学適齢期になり、大坪林にもっとも近い新店小学校に入学することになった。学校へは田圃、畑、墓地、小高い草山など、田舎道を4キロ通った。生徒の数も30

人程度だった。

道端には、日本で見られないような珍しい草花が茂っていたが、その中でも最も印象的なのは、大きなピンクの花弁である。この花は野ボタンといい、墓地のあちこちに見られた。

日本から来て珍しいのは、小学校の校庭にある竹林である。この竹は日本のものと異なり、刺竹とってトゲが竹の節のところについている。台湾の田舎では、こんもり繁った刺竹の林がいたるところにあり、この竹藪は防風林として、あるいは垣根として役にたっている。

刺竹は野生の竹であるが、モウソウやハチクは筍をとるために住民が育てている。竹藪のほかに目につくことは、緑濃い常緑の木々の種類の多いことである。

しかし、平地近くは気候が熱帯的であるため、針葉樹はみられず、常緑の広葉樹が多く、特にクスノキが植えてあるのが目立った。

校長先生の家の庭には、箕子茸のラン小屋があつて、コチヨウラン、シンビジュームなどのめずらしいランが植えてあつた。

これらのランは近くの山林で捜し求めたもので。数十鉢に植えて、校長先生が楽しんでた。噴霧器でたっぷり水をまかれ、きれいなランの花、ランの香りが満ち溢れ、世の中

* 当時（財）九州環境管理協会理事（九州大学名誉教授）

でこんなきれいなものを初めて見たことであつた。

台湾の山林には、各種各様のきれいな花と匂いのよいランが自生していることを段々と知るようになった。これは熱帯性の密林が生い茂っているからである。

このごろブッソウゲという人はほとんどいない。ハイビスカスというしゃれた属名で呼んでいる。

台湾に来て日本と異なった印象の一つは、どこの庭にいても深紅の大輪の花が咲いていることだ。緑の常緑の庭木に混じって、深紅の大輪の花はまず目をひく。

特に台湾南部ほどその花の色があざやかだ。熱帯を代表する花色である。

ところがこの花色にも形にもいろいろあって、深紅、黄色、八重、単輪、風鈴形などがある。風鈴形のは風鈴ブッソウゲといい、栽培植物でメシベが長く伸びて垂直に垂れ下がっているものがある。台湾、琉球や東南アジアなどで、庭木として植えてある、珍しい花の形のハイビスカスである。

ブッソウゲは台湾の代表的な花であると思って調べてみると、台湾でなくハワイで品種改良されていて、いろんな色彩のものがある。

濃紺のものがあるらしくこれが黒く見えるという人から聞いた話では、東南アジアなどで旅行してもそんなのは見られない。

このようなものを品種改良して作ってみたいらどうだろうか。

大きな深紅のブッソウゲの花は、東南アジア熱帯ならどこに行っても美しく見られる。東南アジア熱帯砂浜の海岸は海浜林といってヤマアサの群生を見る。

これはハイビスカス属の一種で黄色の大花はきれいだ。その北限は宮崎県の海岸に見ら

れるが、小笠原諸島にはここ特有の別種が見られる。その形はブッソウゲによくにているが少し小さく、ムクゲという薄紫色の花より少し大きい。

●我が庭

オオキツネノカミソリは長崎県の平戸島を中心に野生の状態分布していて、11月頃九州では黄色い花を咲かせる。

10数年前、天草から長崎にかけて旅行をした時採取したこの野生の花が、毎年時を違わず我が家の庭で開花して目を楽しませてくれる。

スイセン科の植物は、日本では他にこれを見ない。他に黄色の野生として野原で見ると、カンゾウというのがある。これは開花時期が少し早く、10月頃には我が庭で開花している。

この2つの野草は我が庭の野草の代表である。春から夏にかけては熊本からもらって移植したヒゴツバキが開花する。

これは移植したとき2尺位の苗木であったが、10周年経った今日、5尺ぐらいの高さに成長して八重咲きの大輪のピンクの花を咲かせてくれる。

ツバキといえはこんな西洋人好みの色彩よりも、やっぱりツバキ色の日本人に見なれた真っ赤な花の色が親しみ深い。また、真っ白い花のハツアラシやワビスケのようなあつさりしたお茶花が親しみやすい。

このような常緑の葉をバックに白い花、赤い花が咲くのも渋みがあってなかなかよい風情である。

日本的な花木を寄せ植えするのも、庭が狭くては多く植えられないが、それでも九州で

よく見かける必ず花が咲くツバキやサザンカは忘れられない。

我が国の代表的な桜を庭に植えて日本のイメージを失わないように、10数年前に町に売り出されていた桜の苗木を2、3本買ってきて植えた。

昔、桜を楽しんだ人達は山桜を対象とした。これは野生で、今は日本全国いたるところで見られる桜はソメイヨシノで江戸時代、植木職人が偶然に発見した人工の品種である。

桜の若葉が紅色に映えて美しい光景は、里ではほとんど見えないが、春山に登ればその新緑を楽しめる。あの有名な吉野の山の桜も山桜である。

●紅葉

カエデのことをモミジといって紅葉をこの植物の大きな特徴にしている。日本列島は南北に長く広がっているのでカエデの分布状態は、南北できわめて異なっている。

紅葉は温帯の景観の大切な特徴である。中でも東北地方の秋の景色を彩って美しいが、日本の西南部、九州、沖縄から台湾にかけて、温帯から熱帯には東北地方ほど美しい紅葉は見られない。

秋の紅葉は気温の低下に伴ってアントシアニンという色素の増加と葉緑素の減少によって、はっきり目立ってくる。

カエデ科の若葉がすでに春から紅葉しているのは、アントシアニンが堆積しているためであるが晩春から夏にかけて強い日光と気温の上昇によって、葉の緑が鮮やかになる。

カエデといえば紅葉して落下する葉が対生であるのが大きな特長である。紅葉しないカエデもあるが、これは常緑の木のカエデ科の

ものでも、秋の気温の低下が著しくないので、落下しないため紅葉もおこらない。

常緑の木で外見がクスの枝やカシの木の小枝に似ているが、花や葉その他の特長から判断して、カエデ科の植物であることが解る。

こんな植物はよく観察しないと、カエデ科の植物をカシノキ科の植物と間違いやすい。また、クスノキに似ているのでこれも間違いやすい。

台湾の山麓地帯にクスノハカエデというのが自生しているが、小枝や葉が似ているのでこれも間違いやすい。

このように植物というものは周りの気象条件に適合して変わってゆく。このような現象は、台湾ばかりでなくスマトラ島でも見られる。

柿の葉の紅葉は、春先、新芽とともにちらほら始まっている。厚手の柿の葉は薄手のカエデと異なり、熱帯樹木を思い起こさせる。

柿の種類は数百種あって、熱帯、特にマレー群島の代表的なものといえる。これは中国産のものと同じ種類であるが、渋みがあったりなかなか食べられない。

マレー群島に自生する柿の種類はすべて渋柿で、熱帯植物の代表である。従って日本の柿は、東南アジアの北限にあたる。

その柿のおこりが東南アジアであるため、もともと熱帯植物に起源を発している。従って日本と中国には熱帯植物の一端が見られる。その名残として、柿の葉も厚手であって常緑の感を呈しているが、これは温帯の気候に適應したためであって、柿は日本の代表的な落葉樹である。

日本にはこの食用になる柿のほかに、数種の豆柿が九州から東南日本に自生している。したがって柿の木は日本特有の果実といえる。

それと少し趣が異なるが、日本のブドウを東南アジアで育てると、落葉の特長が薄れて

常緑の植物に変わる。これは温帯の植物が熱帯で育ったからである。

付 記

細川先生は、肥後細川家の末裔で、植物分類学の権威であった。九大理学部在任中から定年後まで当協会理事をお願いし、植生を担当して頂いた。

本稿は、昭和55年、亡くなられる少し前に、目のご不自由な中で書かれて協会に届けられたものである。しかし、その時すでに「環

境管理」の編集は終わり、印刷中であつたので先生の原稿を掲載する機を逸してしまった。15年以上も机の引き出しに眠っていた原稿を読んでも、今でも新鮮な情感あふれる文章で、また、植生調査が現在当協会の一つの重要な部門になっていることから、本記念特集号にとり上げるのは、先生のご遺志に沿うものと考えここに掲載させて頂いた。(高島)

